

編集後記

平成十七年九月末頃、西脇先生が京都大學を去ることが明らかになった時、中國西安にいた私を含め、先生に教えを受けた者數名は、退休記念行事として最終講義の開催と退休記念論文集の刊行を提案した。しかし當初先生はかかる記念行事を固辭された。その後周圍からの熱のこもった説得により、「可能な方に気軽に眞摯にご参加いただければ」とやつと頷いていただいた。企畫中、関係者は「くれぐれも大げさにならぬように」と先生から幾度も注意を受けたのである。

平成十八年一月には、在洛の數名の者で話し合いの場を持ち、退休記念行事委員會を正式に發足し、世話人代表をウイッテルン氏、事務局を私が擔當することとなった。そして同年三月十五日に、京都大學總合人間學部にて最終講義が行われた。ここに載せられている『佛母經』小論は當時の講義原稿をベースに書かれている。記念論文集の編纂についても、先生のご意志に従い、幅廣く呼びかけることは控え、若い研究者が成果を披露しあう場として、という方針を固めた。歐米研究者からの寄稿はウイッテルン氏、日中研究者からの寄稿は私が擔當した。當初論文と併せて掲載する豫定であった先生に纏わる隨筆數篇は、體裁を考慮して月報形式の別刷りとした。また、希望者については論文の受理日を記載した。

先生の輝かしい業績の數々は、もとより私ごときが簡単に紹介や批評できるものではない。それは本論文集の序文及び著作目録に譲ることとし、ここでは所屬が異なる文學部の一留學生の立場から、教育者としての先生を

すこし語らせていただきたい。先生は京都大學で教鞭を取っていた二十五年近くの間、日本人のみならず、多くの外國人留學生を親身に世話してこられた。私の知る限りでも、中國、アメリカ、ドイツ、チェコスロバキア、ベルギー、イヌスラエル、臺灣、香港、韓國などの留學生が先生のご指導を受けている。勉強だけでなく生活においても、留學生の保證人になったり、就職の紹介をしたり、時には引越しの手傳いまでされて、物心兩面から何くれとなく援助してこられた。このような先生に出會うことが、留學生にとつて大きな幸せであるのはいうまでもないが、それとともに、講座制のない學部に勤めておられた先生にとつても、こうした出會いは喜びであり、そして今も楽しまれているのであろうと思う。留學生を中心に作ったこのささやかな記念論文集に、我々の感謝の氣持ちを込め、先生との思い出の一齣として残したい。

最終講義の夜、會食でのスピーチで先生は、下村寅太郎先生と「ライフワーク」に關する興味深いエピソードを話してくださった。中國思想史學、佛教史學から敦煌・トルファン學へ、先生の新しい分野への挑戦はまだまだ續くようで、その「ライフワーク」の限界をなお知らない。先生は「一つの研究は十年が一區切りだ」とよく仰つておられるが、今から十年後、果たして先生はどこへ向かい、どんな研究をされているのだろうか。そしてその時我々は、どんな道を歩んでいるのだろうか。

最後に、記念行事全般にわたつて多大な援助をいただいた松田襄兒氏、本論文集の翻譯や校正を手傳つていただいた James Baskind、Demitza Gabrakova、古橋紀宏の三氏、そして煩雜な編集作業を引き受けてくださった小林恒義氏に對し、關係者一同を代表して心より感謝を申し上げます。

平成十九年十二月五日

石立善 記す